

授業時 学習の意欲を高める評価をする

中学2年生のSさんは、数学が苦手な嫌いな教科であった。いつも小テストでは、20点くらいしか取れなかった。「このままでは、いつまでも苦手なままだ。」と考えたSさんは、今度の小テストに向けて勉強することにした。

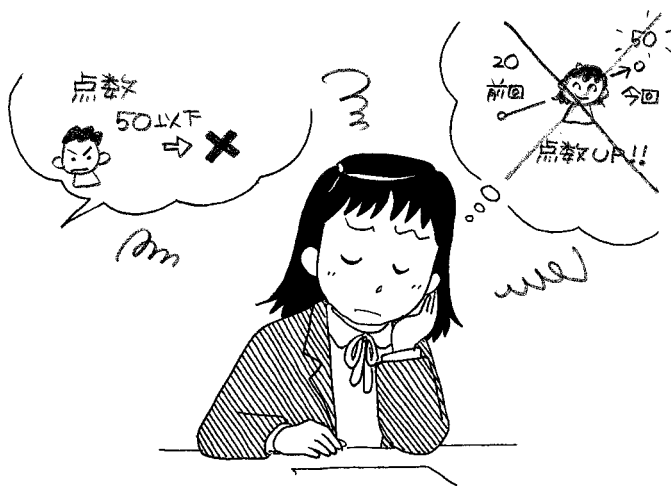
しかし、小学校の算数の内容でも分からないことが多いので、中学校2年の内容を理解するのはとても大変だった。それでも頑張って勉強し、Sさんは次の小テストで50点を取ることができた。

Sさんは、自分が頑張ったことと、いつもより成績が良かったこともあって、とてもうれしい気持ちだった。

全員が小テストの答案を受け取ったあと、数学のT教諭は、「今回80点以上を取ったのは、わずか20%だけだった。この生徒以外は、努力不足だな。特に50点以下の生徒は、もっと勉強しないとだめだぞ。」と

言った。

Sさんは、答案用紙を小さくたたんで机の中にしまいこんだ。



T教諭は、子供たちに一律な評価基準を設定し、それに到達できない子供はすべて努力不足だと評価しています。これでは、子供たちは学習に成就感がもてず、学習の意欲が低下してしまいます。

よくなった点を評価する（個人内評価）

子供たちの学習の意欲を高めるためには、子供たちのよくなった点や可能性、進歩の状況を見る個人内評価をすることが大切です。個人内評価は、子供たちを励ましたり、努力を支援したりする観点に立ち、子供の進歩を促したり、努力を要する点を伝えたりします。机間指導、面談、感想文・作品などの返却の際、通知表の所見欄などを通して積極的に子供たちのよくなった点を伝えていきましょう。

また、個人内評価をする際には、結果だけでなく過程を評価することが大切です。そのためには、スモールステップ（細かな段階）で評価することが有効です。少しでも向上がみられれば、その点を具体的にほめていきましょう。

個に即したメッセージを与える

子供たちが30人いれば、30段階の到達目標があります。事例のSさんの場合は、いつも20点位のところを50点取ったのですから、努力したことが読み取れるはずです。自分なりの努力をし、自分で「やったあ。」と思っているときが、どの子にもあるはずです。そのことをしっかり見届けて、「頑張ったね。すごいよ。」などと個に即した肯定的なメッセージをおくれば、子供たちの学習意欲は確実に高まっていきます。